

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」6月号 (通巻第13号)

2008年5月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

6

June Edition
2008, vol.13
Free of charge

この人の声が聴きたい◎6月

楠美津香さん (楠流家元・女優)

シエイクスピアの全戯曲を ひとりで演ずるスー・パー美女

「スー・パー美津香って知ってる」

「誰、それ」

「だからさ、この世には凄い夢を見る美女がいるってことさ」

「そんなに凄いの」

「そりゃ、シエイクスピアだぜ。しかも、おんなひとり。しかも全作品を演ずるらしい。こりゃ普通じゃないぜ」

もちろん普通ではない。いや、私も噂には聞いていたが、実際に彼女の舞台を見たのは初めてだった。その略歴を見ると、「放送作家とストリップ劇場幕間のコメディアンとDJとラジオパーソナリティ等を経て、実験的一人コントを自作自演」と書かれている。これだけでも異形のおんな芸人の風貌を伝えるに十分であるが、十年間でシエイクスピアの全戯曲をひとりで演ずるといふ彼女のマニフェストを読んだときは、正直だいたいどうぶ

なのかと思っていた。酔狂にしてもほどがある。それで、観たのがハムレット。これが、かなり原作に忠実に再現されていて、シエイクスピアドラマのダイナミズムも堪能させるし、風刺の効いた「入れ事」もあって、大いに笑える仕組みになっているのだ。ただし、登場人物は、ほとんど現代の軽薄なおっさんやおばさん、あんちゃん、ねえちゃんに性格改造されていて、オフィーリアは、ほとんど六本木あたりで遊んでいるアツパパー口調の女子高生で、ハムレットはマザコン不良高校生。悪徳不動産経営者風もあれば、裏町チンピラも出てくる。それぞれが、超饒舌で、汗

を飛ばし、唾を撒き散らしてしゃべくり倒す。

これをひとりの女性が、扇子やコートを巧みに使って演じ分けているのである。長ゼリフ、長回しなんていうもんじゃない。二時間ぶっ続けで言葉と格闘し、客席を席巻してゆく。

「ちょっと大げさじゃねえの」

「いや、そんなことはない。嘘だと思えば見てみなよ」

たしかに、少し大げさかもしれない。しかし、二時間見終わった後の、私の感想は、これこそ演劇の真髄というものであった。演劇に、観客の好奇心をくすぐる意外性とスペクタクルが必須だというのなら、彼女の舞台は十分に意外であり、空間的な広がりも演出されている。演技というものが、憑依のスタイルだとするのなら、彼女は何人も登場人物に

次々に憑依して、秘儀的な雰囲気も十分だ。いや、演劇は庶民の娯楽だというのなら、一人コントで鍛えた技は観客をたっぷり楽しませてくれる。ただ、演劇が多くの人間による共同作業であり、役者どうしのからみ合いによって作り出される仮想現実だというのなら、彼女のやっていることはすこし違うかもしれない。ひとり演劇は、一人の役者がひとりの

役を演ずるわけだから、その範疇からも外れるだろう。でも、いいじゃないかと私は思う。彼女は面白くて、かっこいい。たぶん彼女は役に憑依する前に、シエイクスピアその人に憑依したのだ。そう考えないと、この途方もない企ての辻褄が合わない。

(ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美)



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個人的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにもたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭的思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、絆々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小森・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さん、江戸文化研究の田中優子さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる断家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る断家たち。ライブ音源だけに一期一会の断に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの断家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試験ボタンを。

オリン。パスシンクする寄席

「日時」6月18日(金)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
「場所」お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

三笑亭夢丸

さんしょうてい ゆめまる

三笑亭夢丸に入門、昭和五三年、真打昇進。『ルックルックこんにちは』等のテレビ・リポーターとして活躍するが、落語に専念するためタレント活動を休止していたこともある。落語界の将来を思っ、二一世紀になった平成一三年度から台本公募「夢丸新江戸噺」を開始。落語芸術協会理事。



三笑亭夢吉

さんしょうてい ゆめきち

三笑亭夢丸に入門、平成一八年二ツ目昇進。動物の出てくる噺を得意ネタとし、6年目ながら、熱烈なファンを増やしつつある。聴く人の気持ちを緩めながらもサゲでは陰らせてしまう将来が期待される若手の一人。前座時代に岡本マキ賞受賞。趣味は「あてもなく自転車でさまよつこと」。



明烏い話

連載第14回



本田久作

新作落語を書く者のはしくれとして、いつかは書いてみたい落語が二つある。一つは百人一首の噺である。落語ファンなら誰もが「瀬をはやみ」と「千早ふる」との二首はそらで言える。そんなことができるのは『崇徳院』と「千早」という落語があるおかげだ。そこで、三首目の和歌をお客が覚えてくれるような落語を書いてみたい。

もう一つ書きたいと思っているのが、噺家が洋服を着て立って演じる噺である。もちろん舞台は現代。であれば、衣装は洋服である方が理にかなっていると思うのだ。といって私は、着物を着た噺家が座布団の上に坐って現代を舞台にした噺をするのを非難しているわけではない。私はそういう噺は好きな方だけれどもそれらの噺の価値を認めつつも、洋服を着て立って演じる落語を聞いてみたい、見てみたい。

いつだったかこの話を知人にしたところ、そういう落語はすでにあるという。イッセー尾形がそうだというのだ。私もあの芸は好きだけれども、しかしあれは落語ではない。舞台を一ヶ所に限定せず、一人の芸人があらゆる人間を演じ分けるからこそ落語だ。極端なことを言えば、洋服を着て立って演じる噺家は現代を舞台にしながら、ネタによってはその現代にワープしてやって来た江戸時代の侍もまた演じなければならぬ。その時噺家は洋服を着たまま着物を着た侍を演じるのであ

る。落語と名乗るからには、そこまでできないければならない。だが果たしてそんなことが可能なのか。

三年ほど前に白鳥の「隣の町は戦場だった」を聞いた。白鳥は頭にバンダナを巻きジャージの上下といういでたちで高座に現れた。私は偶然にもその前に楽屋入りする白鳥の姿を見ていたので、白鳥がちゃんと私服から高座着であるジャージに着替えたことにも気づいていた。つまり「もしも洋服を着て落語をするのであればどんな服を着るのか」という問いに対する答は、この時の白鳥にとってはジャージだったのだ。これには驚いた。想像力に乏しい私は、洋服ならば、しかもそれが高座着であるなら背広の上下以外あり得ないと思い込んでいたのだ。だが、この場合白鳥の答の方が正しかった。噺家のジャージ姿は客にもすごいインパクトを与えたが、噺の邪魔には一切ならなかった。また、この時白鳥が座布団の上に正座して演じたのを見て、そうやって坐っている方が立っているよりも仕事の可能性が広がることも私は思い知らされた。坐って演じるのであれば、演技として歩くことも走ること、バイクに乗って疾走することもできる。空を飛ぶことだって可能だ。

だが、同じことを立って演じるのは相当難しいに違いない。さらにつけ加えるなら、立って演じると、おそろく上下をつけて人物を演じ分けることが不自然になる。スタンダップコメディが基本的に一人称の芸である理由はそこにある。一人きりで立ったまま演じる芸人は客以外に話しかける相手はいない。だが、落語は客にではなく、自分が演じる架空の誰かが、さらにもう一人の架空の誰かに話しかける芸なのだ。要するに、坐って演じるといふのはそれぐらいうまく考えられた結果生み

出されたスタイルであったのだ。

であれば、やはり立って演じる落語は不可能なのかと言えば、そうではない。これは落語ではないけれど国本武春は『松山鏡』などを演じる時、スチール椅子に坐る。そしてその状態で武春という一人の芸人がさまざまな人間を演じ分ける。ネタにもよるだろうが、武春のやり方だと椅子に坐って演じることは可能なのだが証明された。であれば、そこから立つまでの距離はあと少しである。猿は立ち上がった二足歩行することで人間になった。落語もこの進化の過程を踏むことはできないのか。

私の讀大ばなし 拾参

古今亭菊之丞

『封間腹』

き そろそろ二ツ目というとき、一朝師匠にお稽古していたのですが、あの師匠ときたら、真剣に聴いていることを稽古中になんとか笑わそうとなさるんです。「芸者だれ呼びます？ 菊之丞なんかどうですか？」とか……。後に、この噺でNHKの大賞をいただき真打が決まったのです。

『片棒』

き いまは亡き志ん朝師匠に褒めていただいた噺です。「おれは、あの三人の倅がみな同じようになっちゃって演じ分けができねえけど、おまえのはできてるな」と。嬉しかったなあ。私の心の宝物です。

『豊志賀の死』

参 二日酔いで、円朝師匠のお墓にお参りせずにこの噺をやっていたら、お久の顔が恐ろしい豊志賀の顔に変わるちょうどそのときにドーン！ という落雷。場内は騒然。翌日すぐに墓前にスツとんでってお詫びを。あなおそろしや。

ロケット団

(ろけとだん)

平成二二年、劇団員から漫才師に転身。世間一般の流行に迎合せず、寄席を中心に活躍中。時事ネタを盛り込ませるスタイルで人気を博し、近年成長著しい、若手漫才界のホープ。平成一八年三月に花形演芸大賞銀賞、平成一八年度文化庁芸術祭演芸部門新人賞など多数受賞。トビック、漫才協会、落語協会所属。



米粒写経

(いぶつしやまう)

平成一〇年、『浅草お兄さん会』でデビュー。良い意味で古臭い居島一平の爆発的かつ徹底したボケに、サンキョータツオのクールで弛緩したツッコミが観るものを虜にする。現在、関東でふたたび漫才ブームを起こすべく、東京の若手漫才師が集結する『漫才バカ一代』を定期的に主催している。オフィス北野所属。



柳家紫文

(やなぎや・しもん)

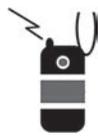
音曲師。平成七年、二代目柳家紫朝に入門。現在、都内の寄席を中心に三味線漫談で出演中。この人抜きで現在の寄席は語れない。さらに歌舞伎座では、常磐津、長明、新内で出演。歌舞伎座と寄席の両本公演に出演した日本で唯一の三味線弾き。邦楽演奏家としても活動中。平成十七年度花形演芸大賞銀賞受賞。



●第1回
ラジオデイズ
MANZAINIGHT
「日時」6月30日(月)午後7時開演(午後6時半開場)
「場所」ハーモニックホール(西新宿)

行こみちが

女流ニツ目の修行日乗⑫



柳亭こみち

楽屋入りして半年経つ頃、実家を出て師匠のそばに住むことになった。嫁に行かないかもしれない嫁入り前の娘を預かった師匠は、汚いアパートに住まわせるわけにはいかない、と知らぬ間に物件を探し、下見までしてくれていた。

狭いけど綺麗な部屋だ。でも当時の私の収入は月三万円。家賃は倍以上する。師匠は「飯は俺の家で食べ、前座として使って貰えるよう、寄席で誰よりも一生懸命働け。腰を軽くして(尻を軽くしてはいけない)、着物畳むのも太鼓叩くのも喜々としてやれ。家賃のうち一万は俺が出す。ほかの前座には言わない」と。

私は着物と布団だけ持って、その部屋に住み始めた。これでどんなに朝早くとも夜遅くとも人並みの睡眠時間を確保。もう満員電車で揺られることなく修業に打ち込める。

引越して数ヶ月、寄席の給金が一日千円から千五百円になった。収入が月一万五千円アップ。師匠からの月一万円支給はこれを機に終了してもらった。生計が立つよう、あとは自分が頑張るのみ。嘶家の仕事の有

無はすべて自己責任。食えなきゃ嘶家向いてないってことだ。これが芸人らしい暮らした！と燃えてきた。その後「こみちはいつもおにぎりを食っている」と噂された。師匠宅のお櫃の残りご飯で作るおにぎりに私の生活はすいぶん支えられたもんだ。師匠は偉大だなあ。

●りゅうていこみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月ニツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、吾妻流名取(舎妻流)。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第13回

健康・救急

松井高志



健康や、いざというときの手当についての話は話芸にも豊富に出てくる。むろん俗信も含まれているが、健康は常に日本人の関心の的なのだ。

まず、これは「酒」のことばともいえるべきかもしれないが、

下戸の薬知らず、上戸の毒知らず

という諺が落語「居酒屋」や、講談「赤穂義士外伝」の「小山田庄左衛門」に出てくる。下戸は適度な飲酒(百薬の長)が体によいと頭で分かっているが飲めない。逆に、上戸は過度な飲酒が体に毒だと頭で分かっているがセーブできない。ああ世の中はままたぬものよ、ということ。諺として巧緻ではあるが、

この手の皮肉はなんだかすぐ飽きられそうである。

もっと実用的な教訓では、

親が死んでも食休み

というのがよく講談の昼食の場面などに用いられる。たしか浪曲の「越後伝吉(東家浦太郎)」にもあったはずだ。「食休み」は「しよくやすみ」だが「じきやすみ」とも読む。食事を摂ったあと、休息をとらずに働くのは体に悪い、ということ。どんな時でも、食後は一休みしなさい、という教え。

困った時の手当で、という意味では、
鼻血が出たときは首筋の毛を三本抜くこと
ぐに止まる

というのが、迷信を扱った噺の冒頭などに、種々のまじないの一例として挙げてあり、三遊亭円朝の「真景累ヶ淵」にも出てくる(ただしこちらでは「二本抜けば効く」ことになっている)。

こんな迷信じみたものでなく、より実体験に基づく「知恵」だろうと思われるのが、「夕立勘五郎」など、俠客ものの講談によく出てくる、

手負いに水は毒

だろう。重傷を負った者に、いくら水がまわっても水を与えてはいけない(それっきりことされてしまうから)ということ。これはもはや健康どころの問題ではないか……。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。四月に、落語・講談逸話に出てくるあて字・難読語をドリル形式にまとめた新刊『ナンドク【難読漢字自習帳】(ハンジリコ)』が発売されたばかり。「話芸・きまり文句」辞典」サイトは <http://wagelidon.cocolog-nifty.com/>

ラジオデイズ落語会

【会場】コア石響（四ツ谷）【木戸銭】2500円
 【時間】午後2時半開演（午後2時開場）

●第13回 7月5日◎

瀧川鯉昇 二遊亭遊雀

ラジオデイズ若手噺家の会

【会場】コア石響（四ツ谷）【木戸銭】1500円
 【時間】午後6時半開演（午後6時開場）

●第2回 7月5日◎

五街道弥助 三遊亭好二郎
 春風亭一之輔 三笑亭朝夢

※予約申込受付中！ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三三三三〇より、先着順です。

オリンパスシンクくる寄席

【会場】お江戸日本橋亭 【木戸銭】2000円
 【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●第14回 7月16日◎

古今亭志ん五 古今亭志ん橋

※予約申込受付中！ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三三三三〇より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地忠彦、大森美知子、そして大阪は1408の稼働エンジニア江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語りこを傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

今後の放送予定（深夜のお客様）

6月3日 新井敏記（SWITCH）VOYOTE編集長）

10日 谷川俊太郎（詩人・翻訳家）

17日 森田恭通（インテリアデザイナー）

24日 山口文憲（エッセイスト）

皇月の落語会ふたつ

今月の落語会は、5月17日の、なんと昼夜開催。昼席は第1回目となるラジオデイズ若手噺家の会で、春風亭栄助さん、瀧川鯉橋さん、立川志ら乃さん、柳家わさびさんと力のあるフレッシュな面々が集まりました。開口一番わさびさんは「金明竹」、独特のだるさと大阪弁の言いたでの対比の妙が効いていました。続く志ら乃さんは大ネタ「火焰太鼓」、勢いのある噺っぷりに観客が引き込まれ、さすが明日の立川流を担うべき逸材と納得させられました。お仲入りのあとは鯉橋さんの「こんにやく問答」、鯉昇師匠の芸風を受け継いでおもしろい上にヨウスがいときては人気が出ないはずがありません。トリアはこの秋真打昇進が決まっている栄助さん「大山詣り」でひと暴れ。新作では今やブランドものの栄助さんですが、近頃は古典にも力を入れています。どちらにしても達人な噺っぷりは変わりません。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地忠彦、大森美知子、そして大阪は1408の稼働エンジニア江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語りこを傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

今後の放送予定（深夜のお客様）

6月3日 新井敏記（SWITCH）VOYOTE編集長）

10日 谷川俊太郎（詩人・翻訳家）

17日 森田恭通（インテリアデザイナー）

24日 山口文憲（エッセイスト）

菊之丞師匠で「替わり目」を好演。陽気な酔っぱらいに可愛いおかみさん。明治時代の夫婦はあったかいですねえ。トリアはもちろん扇辰師匠。ネタは「井戸の茶碗」。実直な若侍、正直者の屑屋と頑固な浪人という有り得ない取り合わせの三人が煤けた仏像を売り買いつける、ただそれだけで古典落語屈指の名作に仕上がるから不思議だ。いい人しか出てこない人情噺に分かつちやいるけど涙が溢れる。この扇辰と菊之丞両師匠、一見ミスマッチな取り合わせと思いきや、実に楽しく明るい落語三昧の夜でした。不景気風もぶつ飛ばす！いやー、落語ってホントにおもしろい。（ラジオデイズ寺和尚）



オリンパスシンクくる寄席の「楽屋口（^o^）」

シンクくる寄席オリジナルコンテンツ「楽屋口（^o^）」が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R（シンクくる）をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp（オリンパスのシンク★Rの公式サイト）に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R（シンクくる）アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すれば OK。オリンパスシンクくる寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ！

シンクくる（Sync ★R）とは？

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

心地よい晴天続きのこの頃。木々が生い茂る新御苑は、たくさんの子どもたちが遠足に訪れているようで、楽しげで賑やかな声が社内にも聞こえてきます。

ラジオデイズでは、「若手噺家の会」、「MANZAI Night」と新しい催しがスタート。今後も皆様に喜んでいただけるよう、あらゆる企画を考えて参りますので、末永くお付き合いいただきますようお願い申し上げます。